

LIFE IS TOO SHORT TO BE UNHAPPY.

果てしなき鼓動

Don't squander time, for that is the stuff life is made of.



ハァモニィベル

"This incredible fictional masterpieces have brought even adults like myself from laughter to tears." —Allman None

目次

目次	
< 目次 >	3
I. ソクラテスのアイロニー	
ソクラテスのアイロニー	7
II. 聴こえない森	
聴こえない森	13
III. ロマンチックな挽き肉	
ロマンティックな挽き肉	17
IV. 微笑む肖像	
『微笑む肖像』	23
V. 冬の炎	
冬の炎	29
VI. 或る『幻想小説』	
或る『幻想小説』	39

目次

< 目次 >

ソクラテスのアイロニー

聴こえない森

ロマンチックな挽き肉

『微笑む肖像』

【冬の炎】

或る『幻想小説』

I. ソクラテスのアイロニー

ソクラテスのアイロニー

ソクラテスのアイロニー 2014

毎日、何十個もの隕石がこの地球に向かって降ってくる。ほんの僅か1cm足らずの小さな星屑が、地球に衝突する前に大気中で燃え尽きるとき、それが恋人たちの見上げる夜空をロマンチックに駆けてゆく流れ星となる。

そしてその数年後には、結婚し、ベランダでタバコを喫いながら空を見上げ、毎日、何十個も降ってくる女房の小言が、どうかおさまるようにと、密かに願う時にもやはり、星は流れている筈だ、涙と共に。

だが絶対に、「いっそ楽にしてくれ」などと星に祈らないでほしい。その小さな塊の直径が100mになるだけで、その願いは十分すぎるほど叶ってしまうから。それも恐ろしく驚異的な破壊力で。

1908年6月30日朝7時のことだった。人類史上最大の隕石衝突――ツングースカ大爆発が、中央シベリアの上空を実際に襲ったのは。太陽の如き火球が炸裂し、強烈な火柱、そして真っ黒なキノコ雲が、その時、遥か広大な森林を、それこそあつという間に焼き払ったのだ。

もし同じ隕石が東京に飛来したなら、たかだか直径100mの隕石が実は、広島型原爆1000個分に匹敵することや、関東平野を全滅させてしまったニュースも聞かぬまま、知らぬままそこに居る人間達はみな熱風によって、燃えて死ぬよりまえに、蒸発して消えてしまう。

ごく些細なものが、それ程凄まじい破壊力を持っている。

僅かな妻の一言もまた、DV大爆発の火柱といい、部屋一面の壊滅といい、一挙にダンナを蒸発させることといい、凄まじい破壊力を恐ろしいほどに秘めていたりする。

発する時は僅かな破片にすぎずとも、飛来する衝撃波は凄まじいのだ。この規模の隕石は、悲しいかないつ会社をクビになるかわからないのに似て、いつなん時落ちてくるのかわからないのだという。数百年に一度らしいが、観測したくても小さくて地球からは接近が見えないのだ。

そして、……それが見えた時はもう遅い。

隕石ならぬ漱石が倫敦から日本へ戻ったのは明治36年(1903年)のこと。帝大のほかは一高でも教鞭を執ったが、生徒の中にあの藤村操がいた。授業中に強く叱責した数日後、このエリート一高生は遺書『巖頭之感』を立木に刻んで、不可解にも、華嚴の滝に身を投げた。動機は2つの失恋だったのかも知れなかったし、本当の所はわからない。

しかし、皮肉なタイミングが漱石に衝撃を与える。翌月から極度にノイローゼを悪化させ、家族とは別居、離婚の危機にまで発展した。そして、後々まで後味の悪さを引き摺ったであろう。漱石は愛情の、藤村操は自尊心の〈不可解〉に苦しんだ。小言とは不満な相手への形を変えた愛である。自殺とは時に生き恥を背負つづけることに耐えられぬ殺せないプライドの末路である。事件の社会的な波及力も大きかった。奇妙に流行して後追い185名が投身を図り、40名が遂げている。

小さな事柄から、巨大な波紋が引き起されるのは全く不可解である。ただ、もうちょっと跳ぶのを待ってさえいれば、この年、ライト兄弟がはじめて空を飛んだのを知ることができただろう。

大昔。「嗚呼、プテラノドンのように大空を飛びたいなあ」とステゴサウルスが嘆じることもなければ、夕陽を見て涙するトリケラトプスも居ず、雌のティラノサウルスが「海が見たいの」とわがままを言うことも皆無だった。いきなり嘔み付くことはあっただろうが。

かつての地球の王に知性はなかった。寝不足で疲れたイグアノドンが栄養ドリンクを飲んで、なんだ、これはスティック7本分の糖分で血糖値が上って元気が出た気がするだけじゃないのか、と考えたりはしなかった。だが、その分、適応能力がおそろしく発達していた。だから2億年近くもこの地上に生きたのだ。たぶんもっと、あの6千500万年前ユカタン半島を直撃した半径10kmにもなる広島型原爆の10億倍という、M(マグニチュード)13の地震と高さ1kmの津波を引き起こした史上最大の隕石が、外から降ってさえこなければ。

一方、知性的なはずの人類は、わずか10万年で、自分たち一人ひとりを隕石にってしまった。わずかなボタン操作で大勢を巻き添えにしてしまう危険を誰もが備えてしまったからである。

ひと昔前であれば、馬を駆るなら一馬力、四頭立て馬車でも四馬力のコントロールで済んでいた。それがいまや500人の乗客を乗せたジェット旅客機を2名で飛ばし、1500人の乗客を乗せた新幹線を1人で走らせる時代となった。ボタンの押し間違い一つで、大惨事が引き起こされる可能性が周囲にあふれている。

有機リン系の殺虫剤マラチオンは、ダニ・ハエ・アブラムシなどの駆除に使われる。はじめて日本に入ったとき、ヘリで畑に散布されたが、地域の子供たちに平衡感覚の異常が認められたのは7年経ってからだった。マラチオンは、空気や太陽光で、マラ

オキソンという物質に変化して、毒性が10倍から50倍に増幅する。

精子数を減少させる危惧もあるマラチオンだが、ポスト・ハーベスト農薬として収穫後の作物に散布され、少子化を騒ぐ日本への輸入食材の多くに含まれている。

食のチャイナシンドロームに、「疑わしきは食さず」と、自己防衛を貫けば、コンビニの『タラコおにぎり』の海苔とタラコが食べられない。スタミナGETのうなぎからマラカイトグリーンもGET。成長ホルモンと抗生物質を濫用した異常成長のブロイラー鶏肉の唐揚げ。冷凍しても死滅しない大腸菌が、農薬や添加物とともに残留する冷凍食品等等など。

安ければ毒でもいいのは、買い手より売り手側の最大多数の最大幸福。微量は大きな被害にならないという言葉、空高く積み重ねる悪魔の見えざる手。

例えば、一枚のうすい「紙をハサミで50回切って重ねたら」その厚さはどのくらいになるか、というパズルがある。

タテヨコ1m四方の紙で、厚さを0.1mmに設定してみよう。

2回切ると、50cm四方が4枚になり、

重ねると、0.1mm 4 で、厚さは0.4mm

さらに、

もう2回切ると、25cm四方が16枚になり、

重ねると、0.1mm 16 で、厚さは1.6mm

どうやら、

0.1mm $(2 \text{ の } [\text{切った回数}] \text{ 乗})$ になっている。

すると、

0.1mm $(2 \text{ の } 50 \text{ 乗})$ が答え = 1.13 億 km の厚さとなる。

0.1mmという極薄の紙一枚が、地球から太陽までの距離(1.5億km)に迫ってしまう。

ただ、こんなに切れるハサミがどこにあるのかプラグマティックな疑問もあるけれど。

日本料理がユネスコの無形文化遺産に登録された。農水省の推計では、いまや世界に5万軒以上の和食レストランがあるという。

早速、ツアーに出かけよう。ロンドンのトラファルガー広場に到着して出会うのは和食と称するB級中華。ピカデリー・サーカスを歩いて、靴を脱がない炬燵式のテーブルに着くと、運ばれるのは韓流激辛の親子丼。

やはりイギリスは口に合わずと、美食の街パリを訪ねてみれば、そこにはチョコのように甘い刺し身がトレビアン。バスティーユの歓楽街で供される、生臭ドス黒まぐろ

に舌が悶絶する。

魚介料理が得意なイタリアで口直しだと、出会ったイタリア美人おすすめの懐かしいオニギリを頬張れば、にぎられてるのは、酸っぱい酢飯。

ふざけやがってとシェフを呼び、わけを質せば都市だけ栄え、見捨てられた田舎で餓死を横目に雑草を食い生き延びてきた、国も宗教も捨てた悲しき味覚音痴の中国人コック。ここにも食のシンドローム。無形文化遺産のふざけたパロディの繁殖がクール。

太陽系の最高峰、火星にあるオリンポス山と山頂のカルデラ湖オリンポス湖が、ユネスコ世界遺産に登録されるのはいつだろう。片道 180 日、宇宙線被曝量の許容範囲 1000 ミリシーベルトの半分以上を超えるから、観光は片道切符になるけれど。やがて太陽にやられる地球から逃がれるため、むこうで芋虫と毛虫を食べて暮らす火星移住計画は、移住者の第一次審査に日本人 10 名が合格したということだ。

いま組織論では、「パスゴール理論」なるものが重視されているらしい。有能なリーダーは道筋を示して途中の障害を減らしながらメンバー・集団の円滑な目標達成を促すことが要務だというのだ。

でも大丈夫だろうか。邪なゴールしか描かない年長者と、少しは苦勞した方がいいような年少者の集まりばかりだとは言いきれないが、それでも二律背反の迷妄の陰にいつも、潜りこんでいるやっかいな真理というやつを、根気強く連れ出す方法を教えた真の知者に皮肉な最期を選ばせがちな癖がいまも人類にないとも言いきれない、そこで生きるぼくたちの未来は。

太陽が赤色巨星となり、地球も火星も吞まれるか焼かれるかする数十億年後の未来までには、方舟に乗って皆で太陽系を出なくてははいけないというのに。

今はまだ、クモの糸を取り合うゲームにかまけていても。

(—2014 年 冬— ハァモニィベル作の詩)

II. 聴こえない森

聴こえない森

『 聴こえない森 』

閉じ込められて3日目の朝
ここは、冷蔵庫3丁目
消えた空を想って泣く。
反応したセンサーが人工的な光でありありと
照らし出す……
緑色に引き裂かれた傷跡
ココを出ればたちまち膿んでしまうはずの傷跡

まざまざと
自分でそれを
見つけ出しておきながら、それでも尚
探し続けるフリをした

見えたままの盲目となって
さ迷い続ける毎日。

或る日、
鳥肌の立った肉塊が、目の前の味噌を憎む
恐ろしいのはレタスの髪型
それを、やたらと褒めちぎり
ネットリと見つめるマヨネーズのしろいうなじ
初体験の果物ナイフに怯えた不機嫌なチーズの体臭
ひんやりと暗く
静かで賑やかな・・・
この真四角な思想

Ⅲ. ロマンチックな挽き肉

ロマンティックな挽き肉

ロマンティックな挽き肉

——あの左手の残酷は、その右手の歓びである。

きみは、いま静かに床について居て、

もうすぐ死んでしまうのだ、…としてみよう。

それを見た一人の友人が、…例えば、「やっぱり最後は漱石か」と、一言…つぶやく。

そこから、この詩は始まるが、悪く思わないでくれ。

するとね、きみは、死にきれずにその友人に訊くだろう。

「それは、一体どういうことか？」…とね。

すると友人は、こんな風に…

語りつづけるんだ……

漱石が胃弱だったのは御存知の通りだよ。なのに食への意欲は旺盛だったらしい。

一説では、末期の言葉は、「何か喰いたい」だったなんていう話もある。

最期は、上等なワインを一口飲んで、永眠（ねむ）りについたんだとかね。

そこで、きみも、最期に何か食べたくはないか、とってね。

とはいっても、もうすぐ、お迎えがきてしまうわけだが……。

さあ、何が食べたい？

云ってくれよ。最期なんだから、

遠慮しないで。さあ、

たとえば、子どもの頃に大好物だったものなんかどうだい？

俺はサラミが好きだったなあ、きみはどうか。

好みが同じなら、「食べられる国宝」なんて云われてる“マンガリツツア”のハムなんかどうだい。

ハンガリーは街並みも美しく、愛する女性を伴っていれば、尚理想的さ。

伝統のある有名なカフェ巡りだって出来るシグルメにはうってつけだ。

世界一のカフェと評判の“ニューヨークカフェ”なんか、カフェの概念を変えてしまう造りだよ。

それにあの、ドナウ川のナイトクルージングで観るブダペストの夜景が幻想的でね。

そんな風にすごした翌朝、

パンとスープに添えられて出てくる、

・・・たっぶりのマンガリツツア・ハム・・・

毎朝食べても飽きないという、その絶妙な味を、最期に頬張ってみたいかない？

もしも、きみがマンガリツツアじゃなく、イベリコ豚でもいいなら、スペインにしよう。ハムも果物も魚介類も、格安なのに、何を食べたって旨いときてる。天国に行く前にぜひ一度は立寄りたい処だよ。

フレンチの高級な料理を堅苦しく食べるのは来世にまわしてさ、むしろ穴場のベルギーに行ってみるのだから悪くないな。

死ぬ前に、ベルギーのムール貝を食べてけよ。

その他にも凝った料理がいろいろあるんだ。

ウサギや鹿だってある。ジビエだな。煮込んだ料理がまた、何ともたまらないぜ。

何？ そうか、それ以上に刺激のある美味しいものが食べたいっていうんだな。

じゃあ、マレーシアできまりだよ。イスラム風、インド風、トルコ風、三通りの辛い料理が堪能できる。

多国籍風オリジナル料理が十分に味わいたいんなら、シンガポールにもついでに寄ればいいさ。

さあ、どうだい、段々と死ねなくなって来たろう。

そうさ、なんたって、きみは、古代ギリシア最古の文明があった地に行っていないからな。2500年前からあるグルメスポットだっていうのに。

クレタ島は、
エーゲ海の最南端、
東地中海の真ん中辺りにあるのさ。
ギリシャの島の中では最大（沖縄本島の七倍くらい）で、
その広大な土地に

オリーブやトマトやアーティチョーク、……
豊富な柑橘類に、葡萄にバナナ、……

それこそありとあらゆる果物と野菜がつくられてる。

なかでも、
オリーブオイルとハーブに特に恵まれてる。
最高級の ExtraVirginOil そして 野山であまた取れる天然ハーブたち

オレガノ、マジョラム、ローズマリー、タイム、……

蜂たちが、
それらのハーブや柑橘類から独特の上質なハチミツを収集してくれる。
また、
それらのハーブを食べて育った羊や山羊からは、クレタ特産のチーズが得られる。

ギリシアでは、塩とオリーブオイルだけで、サラダもパンも、十分に御馳走となる。
なのにその上、
新鮮な魚介類に、
チーズやトマトを加え、
ニンニクやハーブで炒めたり 和えたりした
バリエーション豊富な逸品が
種々供されるんだ……

どうだい。もう既に天国だと思わないかい？

クレタの通りを二人で歩いていると、程好く灼けたスブラキ（串刺し肉）の何とも言えない好い匂いがしてくる。そこには歴史のうねりも漂わせながら、それでもその香ばしい煙りが

この世界の素晴らしい一端を、《瞬間》を、
これ以上ないほど伝えてくる…

どうだい？ まだまだ先は続くんだぜ

もうこうなったら、まずは絶品の焼き鳥をば存分に喰いに行こうじゃないか。

とりあえず、駅前まで。

* * *

メモ：〔本作品は、【読んだらお腹が空く詩】という出題に応じて、書いたもの〕

IV. 微笑む肖像

『微笑む肖像』

『微笑む肖像』

荒涼とした
砂漠をゆく
幻の駱駝が、
ふいに…輪廻して戻ってくるように…

ときに肖像画は、
物語を語り出すことがある。

ルーヴルから その日、
一人の怪盗の手によって

《彼女》は、

その微笑みと共に消えた。

そのあと、
よく似た六枚の微笑みが
六人の金持ちに売れたそう。

或る日、《彼女》が何食わぬ顔で戻ってくると
人々は、あらかじめ準備しておいた
彼女の体の細部を
詳細な——彼女の細切れな原形画像を、取り出してきた。

そして入念に、彼女の全身を調べ出した。

だが、元々、ある人々は、以前から彼女のことを疑っていた。

彼女が、そもそも誰なのか
前からそれを知りたがっていた。
高脂血症を病んだ人物のセルフイー（自画像）で

あるとか
ないとか・・・ はたまた、

描いた画家の母で
あるとか・・・
ないとか・・・

美女の正体をつかむのは容易ではない。

だが勿論、あなたにはお解りだろう
《彼女》の名前は、ダヴィンチ作『Mona Lisa』だ。

戻って来た時、
オークションハウスで8億の値がついたと言うのは
これもさらわれた姫君。話は変わるが、こちらは誰だろう
クラナッハ作『ジビュレ・フォン・クレーフェの肖像』である。
この《彼女》には、有名な妹がいる。

勿論、ホルバイン作『アン・オブ・クレーヴズの肖像』のことである。

1539年、イングランド国王ヘンリー8世は、妃を探していた。そこで
お抱えの宮廷画家ホルバインを外国へ派遣した。
姫たちの肖像画を描かせて、その姿を見る為だ。
そうして選ばれたのが、四番目の妃となったアンだった。

ただ、その美貌の肖像画、じつは
クロムウェルとホルバインが手を加えた合作だったらしい。
王室史上最高のインテリと言われ、スポーツも万能であったヘンリー8世は、気性も荒
く、離婚に反対したトマス・モアを処刑して六回も結婚をくり返した人である。
それが実際に、やってきた実物のアンを眼にしたとき。
そのささやかな瞬間に、歴史に彩りが添えられてしまった。

半年後、

まったく肌に触れられぬままアンは「王の妹」となった、
のも、

クロムウェルの首が、ロンドン橋の上で
トマス・モアと同じ景色を見ることになった、
のも、

有り得ない程、オカシな事ではなかったろう。

その一方で、

有り得ない程の一途な恋心も
この世には稀にあるらしい。

アンとは対照的な美女の歴史（ものがたり）も、英国にはある。
自分を奪わせたその美女は、
その後もなお、ずっと、奪った男の心を奪い続けて
けして離さなかった。

そんな《美女》もいた…

金の為でなく、ただ その絵のために
その男は 奪い、
二十五年間というもの、
どんなに貧困なときでも その肖像を手放さず、抱き続けた…

（モナリザが盗まれた頃と同じ、
1900年ごろの話である）

その名画泥棒が手に入れたのは、
当時、世界最高額の絵画であった

ゲーンズボロ 作

『デヴォンシャー公爵夫人ジョージアナ』である。

実物は、英国一の美貌といわれ、
セクシーでもあり、スキャンダラスでもあった。
「待ってちょうだい、……十七のころは、誰もが振り返るほど
美しい公爵夫人だったのよ。それを覚えておいて」
そんな魅力的な彼女の死後、

それから一世紀を経てオークションにかけられた時も、なおその魅惑によって、誰もが振り返るほどの飛びぬけた落札額を叩き出した。

その魅力ゆえに、購入者には短期間の一般公開が義務付けられた。

男が、彼女を奪ったのは、そのときだ。
1876年5月の夜であった。

それから、二十五年間、片時も離れずに
彼は、彼女と過ごしたという。

旅行の時は二重底の鞆の下に入れ、
寝るときも、マットレスの間に挟んで伴に眠った。
警察に追われ、窮地に陥ったときもあった
カネに困ってどうしようもないときもあった
そんなとき、同業者は誘いの水に向けてくる
だが、その肖像画だけは、
どんな時でも、頑として、男は守り抜いた。

やがて年老いて、
ピンカートンの探偵たちに追いつめられるまでは。

どんな時も、彼と共にいた美貌の公爵夫人は、後世、
1997年パリで謎の死をとげる元英国皇太子妃を子孫にもつことになった。

そして、
その美貌の肖像画を愛し続けた男は…、
シャーロックホームズの宿敵、モリアーティ教授のモデルになった。

*
(End)

V. 冬の炎

冬の炎

【冬の炎】

友人のハァモニベルのもとを、私はクリスマスの前日に突然訪れた。孤独な彼を慰めるというのは、じつは口実で、彼からまた役に立つアドバイスをもらおうと思ったのだ。ハァモニベルはくつろいだガウン姿で、ソファにもたれて紅茶を飲みながら、さっきまで読んでいたらしい皺苦茶の手紙と、数冊の本を目の前のテーブルに広げたままだった。手紙は随分くたびれていて、何ヶ所か破れてしまっている。その脇には小型の外国語の辞書が一冊置かれていた。彼は大きなティーコジーを外すとポットがまだ十分温かいのを確認してから、紅茶を私の分も洒落たカップに注いで出してくれた。

「お邪魔しちゃったかしら」と私が言うと、
「とんでもない。大歓迎さ。ちょうど話し相手が欲しかったところだよ」と彼。
「それ、手紙みたいね」
「ああこれかい。ユウコフという少年が書いたロシア語の手紙さ。
マカリッチという男に宛てて書かれている」

どんな手紙なのか私は好奇心で尋ねてみた。すると、ベルは手紙の中身をかいつまんで説明してくれた。

それは次のようなものであった。

* * * *

クリスマスの晩にね、まだ幼いユウコフは親方や兄弟子たちが着飾って出かけたあと、一人で留守番をしてるんだ。そして帰ってくるまでは、どんなに夜が更けても、眠らずに待っていなければならない。ユウコフは一人きりでたまらなくなってね、戸棚から、こっそりインク壺を出してきてポロポロのペンで…、ほらこの皺苦茶の紙へ手紙を書いたのさ。

誰よりも大好きな、あのマカリッチの旦那様へね。

ユウコフは以前、田舎に住んでいたんだ。マカリッチという旦那のお屋敷にね。

そこの使用人だった母親と一緒にとても楽しく暮らしていたんだが、母親が死んでしまった。そしたら、まだすごく幼いのに、早々と都会に奉公に出されてしまったんだ。この手紙には、そこでの生活が報告されている。

ちょっと読んでみよう。

『きのうわたしは おやかたに かみのけをつかまれ、うらへひきずっていかれてぶたれました。 あかんぼうのかごをゆらしながらいねむりをしたからです。

このまえもおかみさんが サカナをあらえといったから、しっぽからあらったら \newline
おかみさんがいきなり サカナでわたしのかおを つきました。どうしてサカナをしっぽからあらってはいけないのか、わたしにはわかりません。 しょくにんたちは、わたしに たべものを ぬすんでこいていつけます。 こないだもそれを、おやかたにみかって うんとぶたれました。 ぶたれるのはいいんです、けれどぶたれたあと きまってバツとして なんにもたべさしてくれません。

たべるものは、まいにち朝はパンだけで、お昼はゴツタ煮で、夜はパンだけです。お茶やスープは みんな、おやかたとおかみさんが のんでしまって、わたしには、くれません。

夜は、お店でねます。でも あかんぼうといっしょです。あかんぼうとねかされると、あかんぼうがなくて ねむれません。あかんぼうがなきやむまで かごをゆらしてないとぶたれます

マカリッチのだんなさま。おねがいです。

わたしを また村へつれかえてください。どうかおねがいです』

ここでね、ユウコフが泣いていたのが手紙の染みで判るんだ。旦那様のもとで、どんな仕事でもしますから傍においてくださいって、このあと書いていて…、

『村へにげていこうかと、いくども思いました。でもわたしには
靴がありません、雪でおった道は、はだしではどうしてもだめです』

こんなひとりの少年の願いが綴られた内容なのさ。

「それで、マカリッチの旦那様は迎えに来たの？」

「さあ、どうなったんだろうね。ユウコフがこの手紙をちゃんと出せたのかさえ疑問なんだ」

「靴を贈ってあげたいな。私の靴を贈るわ。私は裸足で帰ってもいいから」

「ふふ。君らしいな。でも安心していいよ。これはね。じつは、
チャーホフの『てがみ』という短編のなかの話なんだ。

この手紙を読むと、

逢いたい人と逢えるだけでクリスマスの奇跡なんだと、僕には思えるよ」

*

普段は表情のないハァモニィベルが笑った時は何ともいえない人を惹きつける魅力があった。彼は、「きみのブーツをユウコフに贈ってやれなくて残念だよ」と笑いながら、丁度遅い食事をしようと思ってたところだし、食事は一人より二人の方がいいからと言って、夜の軽い食事を御馳走してくれた。

「銀の食器もないし、中世騎士の食卓とはいかないけどね」

「このお肉やけに美味しいわ。牛とも羊とも違う...何とというか」

「鹿肉の香草焼きさ。こっちのお粥みたいなのはフルーメンティといって、大昔クリスマス・イブの定番料理だったんだ」

私は食べながら、ふと気がついて訊いた。

「ところで、その小さな赤い本は何なの？」

「これかい。こっちは、ある少女の話さ。あの手紙のような少年もいれば、

こんな少女もいる.....

『プレゼントのないクリスマスなんか、クリスマスじゃない』

そうジョーが言うと、おかあさんは言いました。

『クリスマスの朝、枕の下をご覧ください。きっとあるわ』

クリスマスの朝でした。まだ仄暗い明方です。一番に目を覚まし
たジョーは、おかあさんの言葉を思い出して枕の下を探してみると
小さな赤い本がありました。』

この赤い本が、その時に出てきた本さ」と、
事も無げにベルが言うので、思わず私は、

「えっ、どうしてそれが其処にあるの。それにさっきの手紙だって.....」
と訊いた。

ベルは、意味ありげな笑いを浮かべて私を見ながら、それには答えずに話を続けた。

「これらは外国の子供の話だけど、日本だって昔から変わらないさ。

実はね、クリスマスには2つあるんだよ」

*

ハァモニィベルは、書棚から本を一冊抜き出して来て、開くと、ある一節を朗読し始めた。高くもなく低くもない、囁くようでありながら包むようなとにかく端正な優しい声だ。ベル自身は自分で「幸福の王子の声」といつているその声で、彼が朗読したのは次の一節だった。

『ところが、みっちゃんの方は、朝、目を醒ましてみると、リボンと鉛筆とナイフとだけしかありませんでした。みっちゃんは、ストーブの煙突をのぞいて見ましたが、外には何も出てきませんでした。みっちゃんは泣き出しました。いくら沢山贈物があっても、みっちゃんを喜ばせることが出来ないのです。みっちゃんはいくらでも欲しい子でしたから。』

「貴方が言いたいのは、恵まれた子がいる一方でそうでない子がいる、ってことかしら。いえ、待って貴方はそんな平凡な発想はしないから、『貧乏も貪欲もともに飢えていることは変わらない』って、そう言いたいんじゃない？」

私がそう言うと、 \newline

「違うんだ。僕はね、教訓とかお説教は嫌いだから。それにさ、他人にお説教してるヒマがあったら、自分がね、『いくらでもほしい子』がいたら、いくらでも応えてあげようとするようなお人好しを反省したいよ」

このベルの言葉を聞いて、私は突然、今日訪問したわけを思い出した。

で反射的に、

「あっ！ 反省しないでほしいわ。そこは」と叫んでしまった。

「そんなこと言われたら、今日来た理由を言い難くなるもの」

「今日は何で来たんだい？」とベル。

「実は、クリスマスに因んだ詩で何かいいのを、あなたが知らないかと思って。メールや電話より訪ねたほうが色々と蘊蓄も聞けるだろうし、『クリスマスに贈る詩』をなにか書きたいのよ。あっ...でも、あなたの言うクリスマスの2つめがまだだった。それを聞いてからにするわ」

「面白いね。そういうことなら、君はまさに、ミス・グッドタイミングだ。いま話そうとしてた2つめの話題がまさに、ご要望の詩なんだよ。朔太郎の詩だよ、」

*

そう言うとベルは、また別の本を開いて、聞き手に解りやすいよう巧みに間をおいて、その詩を朗読しはじめた。「

クリスマス 萩原朔太郎

我が隣の子の羨ましきに
そが高き窓を覗きたり。
飾れる部屋部屋
我が知らぬ西洋の怪しき玩具と
銀紙のかがやく星屋。
我れにも欲しく・・・
我が家にもクリスマスのあればよからん。
耶蘇教の家の羨ましく
オルガンの唱歌する声を聴きつつ
冬の夜 幼なき眼に 涙ながしぬ。

」

*

「ベル。あなたは、私に 私のクリスマスを 見つめさせようというのね」
「そうかも知れないね。文化伝統のなかの Xmas や風俗流行・世間一般の Xmas と、
そして、 人それぞれの、その人の Xmas がある」

「ねえ、ところで、ベル。あなたは、Xmas に何か贈るの？」
「僕かい？ 僕は…… これさ、【冬の炎】とでも題する詩物語を……」

*

【冬の炎】

冬—それは一僕には果てしない孤独。
原始の冬 いにしえの人々はそこで火を愛した。
赤々と燃える火に、人々の身体は火照って暖まり

その温もりのなかにやがて微睡眠
ウトウトと……優しい気持ちのなかに
一年の過ぎた日々を……思い出しまれる

火よ、君は
冬を暖かくするまばゆい紅い宝石
」

ベルはそこまで即興で詩を創ると、いきなり私に訊いた。

「きみは、カーバンクルを知ってるかい？」
「ええ Carbuncle なら、以前調べたことがあるわ。
『青い紅玉』ってシャーロックホームズものを読んだ時にね。
確か、『赤い宝石』と『伝説上の怪物』と両方の意味があるって……」
「うん。伝承では怪物がどんな姿をしてるのか、説が一定せず不明だけどね。
ただ、額に真紅の宝石を持っていることと、
その宝石を手に入れた者は、富と名声を得られるという点は、
どの説も共通しているんだ。
通常、カーバンクルと言えば、ルビーやガーネットなどの赤い宝石のこと
だけど、面白いことにそれらの宝石もまた、持つと富と名声が得られると
言われているんだよ」

そう言いながらベルは、小さな碧い箱を取り出してわたしに手渡した。蓋を開けてごらん、と目で合図するので、わたしは受け取った碧い小さな箱の蓋を開けた。

彼は、さっきの詩【冬の炎】の続きを詠みはじめる……

僕はきみに
紅い宝石を贈りたい
きみの冬を暖かくするために
そして、
それはきみが
僕の冬を灯す暖かな火である証

(『冬の炎』 END)

VI. 或る『幻想小説』

或る『幻想小説』

或る『幻想小説』

放課後の教室の隅にある誰かの机の上に一冊、文庫サイズの小さな『幻想小説』が在るのを見つけた時。その時ほど『それ』が確かな《幻想…》と化すことはないだろう。

有り得ることばかりの空間と時間の中にフツーに置かれてしまった《幻想…》。——という

小さく開いた穴

《それ》を塞いでいる、ありとあらゆるありふれた型をした蓋のように、『それ』自身もやはりまた、普段通り偶然そこに横たわっているというだけなのに。

どの教室にも居るように、その教室にも担任が居た。

それは偶々、若い女教師だったのだが、美しいとも利発とも言える彼女の特徴といえば、＝それ＝を信じてもないクセに、＝それ＝がリアルに怖いことである。王子様に出会わない限り絶対に眼を開けないような一途な可愛い頑固さを抱えたまま、それなのに、だからこそ、いつも揺れているように見える。

その彼女がその日偶然、教室に入ってきて、その『幻想小説』を見つけたみたいだ。その仕草から、とりあえず手に取ってみた、という方が正確であったけれど、してみると、それは、彼女の少々浅めだが歳のわりにはけっこう広い知識の中にも心当たりの無い変テコな題名だったし、特徴がある著者の名前もまた、その時初めて見るものだった。

(出たばかりの本なのかな.....!?)

裏をめくると新刊ではないと判ったが発行年月日が、なんと彼女の誕生日とピッタリ一致していた!?

そして、更に奇妙なのが、その下に記載された改訂の日付で、何とそれが

明日なのだ!?

瞬間的に誤植を疑ったが、日付のすぐその下に小さく【★誤植に非ず】と注記がある!!

(えっ、どういう事? ……)

幻想の扉を開いたら、まずは、戦慄するのが礼儀である。彼女もそこで遠慮なく戦慄した。そうなってしまったら、勇気を奮って、「その場所」で夜を過ごしてみなくては吸血鬼には出会えない、というのがやはり伝統的なセオリーでありパターンであり作法であろう。礼儀正しい彼女は、やはり、と言うか、とうとう、本を持ち帰りその夜、ベッドでそれを読み始めてしまった。

幻想小説と思われた『それ』は、読んでみると全篇流れるような叙事詩であり、韻文ではないけれど流れるような散文で、歩行するというよりダンスする様に、そして、まるで遠くまで背中に乗せて泳ぎつづけていく様に、彼女を連れて中へ中へと、物語と一緒にどこまでも流れていった

～～～ 摩天楼鉄道に乗り、やがて、エデンという駅で降ろされた主人公が、そこに巨大な商業都市の栄えを見るまでの(「第一章」)。さっき乗ってきた列車が今世紀最後の列車だと聞かされ、仕方なく彼女が其処で暮らし始める(「第二章」)。すぐに其処に住む人間達が皆ドラキュラである事に気づき始める(「第三章」)。彼女を狙って毎日襲ってくる吸血鬼の群れ。特に執拗に追われた或日、窮地を救ってくれた善良な青年と出逢う(「第四章」)。青年の善き家族とも知り合い仲間も増え、徐々に彼女が彼に惹かれてゆく(「第五章」)。だが彼ら善良な人々、人間だとばかり思った人達は、全員ロボットだった(「第六章」)。……

深夜をまわり、彼女は朦朧とし始めていた…。カクッと急に意識が墮ちそうになる。

強烈な睡魔に何度も襲われながら、何とか、続きを、

その先を、読もうとした。

でも、もう、どう足掻いても起きていられそうもなかった…

物語の後半は、そこから、…ほとんど夢に溶けていった——

~~~~~ 其処での殺伐とした暮らしにようやく馴れた頃、主人公はうっかり罪を犯し、魔女裁判にかけられてしまう。些細な罪なのに重罪なのである。ドラキュラ裁判長と、ロボットの陪審員が出した判決は無情にも、ベルトコンベア労働の無期懲役。主人公（彼女）の犯した罪は、ただ、「仮定法ト 未来完了ヲ 使ッテ 話シタ」（と言う）だけ——の些細な重罪なのであった。

その後、——幻想（ゆめ）——は醒めたのだろうか。

翌朝、伝統と格式ある 夢無県立ベルトコンベア高校の、朝礼からも、教室からも、あの女教師の姿は消えてしまった。どこかで、幸せそうな彼女を見た、という者が何人かいたが、その行方は杳として知れなかった。事件か事故に巻き込まれた、というのが大方の視方である。

ただ、《本当に彼女が今まで存在したのかどうか》、じつはそのことの方が定かではない。誰も生まれただけでは自分になれない。彼女も昨夜ドラキュラとロボットの間でその事を味わい、今日、何処かでしっかりと自分を出産したのかも知れない。その姿があまりにも透明すぎたのかも知れないし、ともすれば、周囲の人たちが全く瞼を開かない為に単に見えないだけ…であるのかも知れない。

あの一冊の『幻想小説』が、放課後の教室の隅にある誰かの机の上に一冊、なぜかまた同じように置かれているということも、ほとんどの人は気づかないままにいる。だから、その奥付に記された発行日が、読む人の誕生日と関わりがあるということに至っては、知る由がないのも至極当然なのかも知れない。

\*

幻想の中でこそ現実うつつの幻から人は醒めることができる。(――本のあとがきより)

< END >



---

果てしなき鼓動【新版】

---

著 ハァモニィベル

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---